

『ノニちゃん』

路面電車。車内に他の乗客はいない。窓を背にして座席に手足を投げだして座る青年と、その隣で鶴を折っている少女。

兄さん「(穏やかに、薄く笑いながら) ねえ、ノニちゃん、何をそんなに怒っているの。なんで黙っているの。……そりゃあ、確かに兄さん、^{まんとうかわ}万灯川まつりに合わせて帰るようにするって約束してたけど、しょうがないでしょう、期末試験が延びちゃったんだから。教授にはちゃんと、ノニちゃんのぶんまで文句を言っておいたよ。(少し声を抑えて) ほら、鶴をこぼさないで。これに入れて。(ト、ビニル袋をノニちゃんに渡す。)

ノニちゃん(スカートのうえに散らばる折り鶴をビニル袋へひとつひとつ入れる。)

兄さん「(窓の外を見て) あ、あのうどん屋、うまいんだ……。それで、けっきょく、諫早には母さんで行ったの?(ノニちゃんに向き直り) ……二万個のロウソク、見たの?」

ノニちゃん(青年の顔を見上げる。)

兄さん「川にも流すんでしょ、あれ。河原にロウソク空には花火で、冥福への祈りと防災の誓い、でしょ。ノニちゃん、ちゃんと黙禱できた?」

ノニちゃん(黙々と鶴を折る。)

兄さん「兄さん、ノニちゃんが花火のあいだ中、母さんに何を言っていたのか知ってるよ。あんなに何度も約束したのに。手紙でも電話でも指を切ったのに。のに、のに、ノニちゃん。…あ、そろそろ築町だ。ノニちゃん。」

兄さんが先に立ち、支払箱に小銭を入れて降りる。後に続くノニちゃんは車掌に何か話しかけ、小さな白い紙片を受け取る。

並んでホームに立つふたり。遠くから、鐘の音が聞こえてくる。

兄さん「エーデルワイスだね。(くすくすと笑いながら) あいかわらずひどい音だな。割れまくっている。ノニちゃんは毎日あんな音を聞いてて、耳が変にならないの。(紙片を握りしめているノニちゃんを見て) ……あっ、まずい、乗り継ぎの切符をもらうの、忘れてた……。あーあ、もう一度お金を払わないとだ。」

ノニちゃん(兄さんをじっと見つめる)

兄さん「(ノニちゃんを見つめ返しながら、楽しそうに) だから、ちゃんと覚えてないって、母さん、あんなに言ってたのに。のに、のに、ノニちゃん。……^{あかきこ}赤迫行きが来たよ、乗ろう。」

電車に乗り込むふたり。車内には、やはりノニちゃんと兄さんしかいない。ノニちゃんは再び

鶴を折りはじめる。兄さんは車窓から街を眺める。

兄さんが突然、笑い出す。

兄さん「(笑いすぎて少し苦しそうに) そう、そう、ここ、ここ、ここだけ馬鹿みたいに道幅が狭いんだよね。今まで電車の左右に車道が走ってたのに、あそこの角を曲がったとたんに小路だなんて。ほら、こんなに人とか、ビルディングが近いよ、いつ見てもちょっとワクワクする。(落ち着きを取り戻し、声を低くして) ……嘘だよ。ほんとうは、ちょっとじゃない。すごくワクワクする。心臓がビクンビクン震える。」

ノニちゃん(折りあがった鶴を入れようとしてビニル袋を開けるが、ひっくり返してしまう。)

兄さん「築町と出島のこの区間だけは、線路を車が走っていい決まりだっけね。……そんな車をうっかり轆いたりしないかな、とか、考える。このあいだの地震だって、こんなこと言ったら怒られるに決まっているけど、」

ノニちゃん(話し続ける兄さんを窺いながら、気づかれぬよう、床に落ちた鶴のいくつかをそっと拾い上げ、膝のうえに載せる。)

兄さん「ほんとうは、あのとき、いっそ日本がまっぴらつに割れちゃえばおもしろいのに、って、思ってたんだ。」

兄さんが、ノニちゃんの手を取って席を立つ。引っ張られるままノニちゃんが立ち上がった瞬間、ノニちゃんのスカートから何十羽もの折り鶴が飛び上がって座席や床に散らばる。兄さんは気づかず、手を繋いだまま昇降口まで歩き、先に降りる。

兄さん「(昇降口を降りてくるノニちゃんを見て) あれ、ぜんぶ置いてきちゃったのか。あーんなにたくさん折ったのに。」

路面電車のチンチンと鳴る音。電車を見送るふたり。

空(天井)が白く光る。

兄さん「(光ったほうを見上げて) ……かみなり……? (ゆっくりとあたりを見回して) ノニちゃん……?」

ノニちゃんがない。

兄さん「ノニちゃん、出ておいで。お菓子も折り紙も好きなだけ買ってあげる」

くるくると回る兄さん。

兄さん「(回転をやめ、残された鶴を眺めながら) ……ノニちゃん……、ノニちゃん、あんなに鶴を折ったのに」